

東京スカイツリー® 4つの挑戦

5月22日に開業の東京スカイツリー。タワーとしては世界一の高さ、634mになります。また、東京スカイツリーは高さだけでなく様々なことに挑戦しています。



平成23年12月24日のクリスマスライティング

形でないタワーは東京スカイツリーが世界でも初めてのもので、特徴の一つになっています。

照明の挑戦……理想の江戸紫を実現

高さ世界一への挑戦……634m = 武蔵

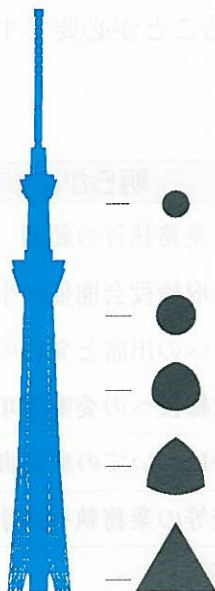
当初は高さを約610mとする計画でしたが、世界各地で高層建築物が計画、建設されているなかで、自立式電波塔として高さ世界一を目指し検討を重ねた結果、634mに決定。634の数字には東京近辺の旧国名である武蔵（むさし）の語呂合わせも考慮し、親しみやすく印象に残る数字になりました。

照明は淡いブルーでタワーの心柱を照らす「粹」と、外周の鉄骨を江戸紫をテーマカラーとし、金箔のような光をちりばめる「雅」の2つが、1日毎に交互に現れます。

特に「雅」に用いられる紫は、光においては表現が非常に難しい色。光の波長が短いため、人間の目で見えにくく遠くまで届きにくいなど、いくつかの試練を乗り越え、青色LEDと蛍光体を組み合わせることで理想の色を実現したといいます。

デザインの挑戦……平面が△から○へ変化

タワーの平面形は足元では正三角形ですが、高くなるほど丸みをおびた三角形となり地上約300mでほぼ正円となります。つまり、このスカイツリーはどの高さで切っても同じ形が無いのです。このように、平面が同じ



最新技術への挑戦……世界初の「心柱制振」

構造物本体の揺れとはタイミングがずれて揺れる「おもり」を構造物に組み合わせることで、構造物全体の揺れを小さくする原理の「質量付加機構」を採用。東京スカイツリーにおいては「構造物本体」が外周の鉄骨塔体、「おもり」が中央の円筒（心柱）部分に当たり、この制振システムによって地震時の揺れを最大50%低減できるといいます。

この制振システムは世界初のオリジナルなもので、「心柱制振」と名付けられました。

参考：ほぼ日刊イトイ新聞、(株)日建設計

【今月のことば】 楽をすることなど考えていては到底、勝ち組にはなれない 永守重信（日本電産社長）

「どんな人間にも、どんな会社にも、1日24時間という条件は平等だ。その中でどれだけ仕事に打ち込むかが成否の分かれ目となる。楽をすることなど考えていては到底、勝ち組にはなれない」

永守氏は、28歳で日本電産株式会社を設立、グループ約170社、従業員数約15万人のグローバル企業へと成長させた。「情熱、熱意、執念」「すぐやる、必ずやる、出来るまでやる」などの独自の経営哲学を持って、常に前向きで積極的な考え方・行動の重要性を説く。最も注目される経営者の一人として挙げられている。